

# 強化の道 多彩でいい

21世紀の  
サッカー論

第4部  
日本の「力」を問う  
2010 07 04 朝日

手の球を追って攻めにつなげる戦い方を基軸とした。「思ひこみのらしさ」と「現実」の違いに向き合ったのがW杯直前の戦い方の変更。プロロクを整備した守備から逆襲を狙い、勝ち進んだ。

チームの大変身は、はからずも日本サッカーの多様な可能性を証明した。個人が弱いから組織？ ストライカーがいない？ それも決めつけを捨てれば、変化を起こせるだろう。

代の若者や日本社会を研究している筑波大教授、土井隆義の話を思い出した。

日本社会で価値が多様化した故に、日本人は「らしさ」を求める。しかし自らの内面を探っただけの「らしさ」は思いこみに過ぎない。現実とのかかわりを通じ、肯定されたり否定されたりする経験によって、実体のある「自分らしさ」ができれば、その過程こそが「成長」だと土井は説いた。

オシムの後を受けて岡田武史が掲げた「日本の良さを生かしたサッカー」は、世界の良大勢であるブロックと呼ばれる守備網は作らず、前線と相

に見える。メディアと視聴者・読者の相互作用によって、大衆に受け入れられやすい物語が作られている」

その流れにあらがってでも事実に基づいた検証をしなければならぬ。大会後、日本サッカー協会は技術委員長・強化担当の原博実を中心にW杯を総括する。ただ日本サッカー協会の見解が、進むべき唯一無二の方向とは受け止めない方がいい。旧通商産業省の元官僚で日本サッカー協会専務理事の経験もある早大大学院教授（スポーツビジネス）の平田竹男の指摘はそこに気づかせてくれる。「かつて日本サッカー協会が持つ情報や人材は、国内で突出していたので中央集権型になった。だが今は情報も人材も日本中に広がり、多様な知見が存在する。各地でそれぞれの方針で選手を育てれば、幅広く切れ目ない選手層ができてくる。そういう育成と強化を模索してもいいだろう」

「大相撲への信頼を崩壊させる事件がほぼ同時期に起きたことで、仲の良さそうな日本代表が余計に美しく魅力的

多彩であることの強靱さ。新しい「日本の力」がそこに見いだせる。第4部終わり（敬称略、編集委員・忠鉢信一）